

心外膜炎が契機となり診断に至った成人スティル病の一例

大津赤十字病院 循環器科

本庄 真彦、滝本 善仁、松岡 智弘、樋口 博一、稲垣 宏一

原 正剛、森川 雅、小西 孝、廣瀬 邦彦

患者は24歳男性。平成21年8月下旬から40℃近くの発熱、咽頭痛あり近医受診し、インフルエンザ陰性とされ急性上気道炎の診断で内服加療されていたが、症状軽快しないため不明熱の原因精査加療目的で他院入院となった。当初は細菌感染症疑われ前医から抗生剤投与されるも効果無く、疼痛に対して非ステロイド系消炎鎮痛剤使用していたが、改善は見られなかった。9月4日胸痛、四肢関節痛と共に心電図上広範囲の ST 上昇認め、急性心外膜炎疑い当院転院となった。血圧低下および胸部レントゲン上肺うっ血認め、うっ血性心不全と判断しカテコラミン、利尿剤等投与開始した。治療開始後徐々に血圧上昇、肺うっ血は改善し、心電図での ST 上昇は基線に回復した。入院後まもなく背部を中心に薄紅色の皮疹も出現し、3歳時に若年性リュウマチ熱既往あり、フェリチン異常高値であった。また抗核抗体陰性、リウマトイド因子陰性、リウマチ関連マーカーも陰性である臨床所見から成人スティル病と診断した。心不全症状改善しステロイド治療のため当院血液内科に転科となった。

今回心外膜炎を契機に診断に至った成人スティル病の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。